

公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団セミナー

第4回環境シンポジウム

「アジアの経済発展と環境問題」

事例発表2

ヤップ島の水と緑保全プロジェクト

<申請者>

NPO法人エコプラス 代表理事

高野孝子氏

<事例発表者>

NPO法人エコプラス 理事

大前純一氏

大前 こんにちは。エコプラスの大前といいます。今からミクロネシア連邦ヤップ州での取り組みについて話をさせていただきます。ヤップ州、あまり知られていない場所なのですけれども、今年の夏のプログラムの時の写真をここにお見せしています。非常に伝統的な島で、ヤシの葉で屋根をふいたこのような建物がまだ残っています。

最初にエコプラスの説明をさせていただきます。エコプラスは1992年に活動を開始しました。今日は勤務先の大学の授業があって来られなかったのですが、高野孝子が代表理事をしております。

彼女は環境教育で博士号をエジンバラ大学で取って日本に戻ってきました。その前には凍結した北極海を犬ぞりなどで横断するというような世界各地での冒険活動をやっています。その中で、世界の特に少数民族の人たちとの関わりの中から、持続可能な社会づくりということに非常に興味を持ち始めて、今は教育者として活動をしています。キーになるのは本物の体験をする、実体験をするということと、そして、常に世界と地域、グローバルなことを考えるけれども、その現場を考える。その二つをキーワードに物事をしております。

会場のみなさんの中で、ヤップ島に行ったという人はいますか。1人、2人、素晴らしい。ありがとうございます。このヤップ島はなかなか行きにくい場所で、グアム島で乗り換えて、週に2便しかありません。小型のボーイング737が真夜中、他のルートに飛んでいない一番暇な時間帯に運行されています。到着は午前1時、出発は午前3時というような非常に厳しいフライトなので当然観光客は行きません。年間の観光客は5000人弱、一つの飛行機が下りてくると30人ぐらいの観光客が来る。でも、それが週に2回です。

本島の人口は8,000人で、石貨が有名です。私は今日、現地の人に作ってもらった石貨のペンダントをしています。大きいものは直径3mぐらいになるような、そういった石のお金が今でも価値を持っています。りそなの金融の方にとってはお金の始まりの物語に必ず出てくる話です。日本がかつて統治していましたので、東京の日比谷公園に石貨が一つ置いてあります。かつての巡洋艦が持ってきたそうなのですが、今はこれは島の外に持ち出せないようになっています。

そういう非常に伝統的な社会の中で、自然と調和した暮らしの知恵と技を集落に入っ、村の中で学ぶことを1992年から展開してきました、今まで400人近くの若者たちに参加してもらっています。最近は大学の授業としても現場で実習的なかたちで展開をさせてもらうようになっています。

1985年、今から30年も前になってしまいましたけれども、私は当時、新聞記者をしておりまして、この島に行きました。大変素敵な島でした。写真にあるようにセーリングカヌーがまだ残っていて、太平洋をナビゲートしてきた人たちの知恵が残っている島でした。

当時、会ったおじいさんたちは、日本統治時代に育っていて日本語もしゃべります。そのおじいさんたちに言わせると、カヌーに乗ってどんどん北に行く。そうすると海が固くなる。それで、帰ってきたという物語があるというのです。ということは、カヌーで北極近くまで行って、氷の海にまで遭遇して、無事に帰ってきた人たちがいるという、そういう人たちの世界です。

当時はある意味、閉鎖的で、旅行ガイドブックには半ページだけ書いてありました。太平洋で最もアンフレンドリーな島と書いてありました。本当に見た感じはすごく怖いです。怖いですが、実は村に入ってしまうと非常に優しい人たちなのです。伝統を重んじます。年寄りを重んじます。そして、静けさを重んじます。

道は人が歩くためのものだ。車が走るものは道と言わない。そう言って、村の入口の小さな川に一本だけの丸木橋をかけて、車はその前で止める。村に入るとサンゴが砕けた細かい真っ白な砂を敷き詰めた幅3mぐらいの白い道がヤシの下にザーッと真っすぐ続いています。毎朝おばあさんたちが竹ぼうきで、ヤシの葉っぱで作ったほうきで掃き清めて、そこにプルメリアの白い花びらが落ちている。もう本当に美しい、天国のような場所だなと思って、この島のことは新聞に書いてはいけないのではないかと思って、書くのはやめました。

その島に縁がありまして通い続けました。1990年代以降見てきましたのは、それまで砂利道でしかなかった道が舗装され、電気が通り、そして、ここに書きましたように、発電所もできました。下水が中心部にできました。そういったものが整備されてきた次に何が起きるか。冷蔵庫ができたおかげで、今までは、魚をいっぱい捕った場合はみんなに分ける、村中で分ける。あるいは捕り過ぎない。それが当たり前だった。ところが、冷蔵庫や冷凍庫があると、凍らせて自分のものにする。あるいは、売ることができる。先ほどの講演の中にありましたマネー化が魚を舞台に起きる。西洋文明が入ってきた途端にマネー化ということが起きてしまったのです。

別な例でいうと、コインランドリーと真っ白になる洗剤というものが登場しました。電気が来て、みんなうれしい。洗濯機は買えないので、村々に共有の洗濯機が並んだコイン

ランドリーができました。しかし、みんながうれしく思ってジャンジャンとコインランドリーを使っていると、排水設備がないので、ブクブク泡が村中のタロイモの畑に流れ込むようになりました。

タロイモというのは巨大なサトイモのようなものです。それに小さな虫が入ってきます。洗剤が流れ込むタロイモ畑は虫が入らない。「きれいなタロイモじゃないの」と言っ
て、地元の人には喜んでいました。しかし、それは何かというと、結局、化学洗剤、ケミカルな洗剤の作用によって虫が死んだだけだったのです。それが健康に被害があるのかどうかすら全く分かりません。そういった変化がどんどん起きています。

結果としていま貧富の差が出てきます。分かち合う「シェアード・エコノミー」だったところが非常にマネタイズされた、お金を持つ人、持たない人、貧富の世界に入ってしまった。しかも、この2010年代以降、中国資本が大規模な開発をするということが起きています。

そういう中で地元の人たちもこのままではいけないだろうということで、ある地域の人たちが、タミル地区という人たちが11の村が集まった地区の中で、この **Resources Conservation Trust**、言えば自然保護基金というようなものを作って、そこで活動を始めました。そこにご助力いただいたのが、りそなアジア・オセアニア財団でした。

村の人たちは先ほど言いましたように、オーバーキャッチ、捕り過ぎで数が減ってしまった魚を何とか保護したいということで、また先ほどもありましたように、サンゴ礁の価値の一つが小さな小魚を再生させるという価値があります。その一番いい再生産の場所を保護するという活動を始めて、粗末なものですけれども、禁漁区の標識を打ち込むことができました。ポスターやパンフレットなども作らせていただいて、密漁者の摘発というようなことまでいま展開できています。

ちょっと写真を見ていただきますと、こんな感じの場所です。もう本当に透き通った場所なのですが、ここもオーバーキャッチのおかげで魚がかなり減りました。今ここを禁漁区にして3年ぐらいたったのですが、ボートが走ると無数の小さな魚がパァッと逃げていくような素晴らしい海になりつつあります。

これが標識です。手作りです。りそなから頂いたお金でコンクリートを買ってきて、砂利と混ぜて、こういう塩ビのパイプを立てて、ここは禁漁区ですよというマークをつけました。それを自分たちで作った大きないかだに乗せて海に運んでいって、これは結構重いのです。30kgぐらあります。それを海の中にみんなで入れて、やっと立ちましたという

ような作業を去年からさせてもらって、60本のマークを打ちました。この作業には日本から行きました大学生たちも参加させてもらって、一緒に作業をさせてもらっています。

しかし、残念なことに、これは横になっているのです。去年も今年もなのですけれども、日本にすごく強い台風が来ています。あの台風が生まれるのは、ほぼこのミクロネシアの西カロリン諸島と呼ばれる地域です。ここでの台風、発達する時は急激に発達しますので、920hPaとか、そういった台風がこの限界で渦巻きます。

先ほどのものは非常に簡単な標識なものですから、波が来るとこうやって倒れてしまうのです。ほぼすべてがノックダウンされました。前年にはすべてのマークの場所をGPSでポジションを全部取っておいたのですけれども、行ってみると片っ端から倒れていました。今年行った、また、これは日本の若者たちが一生懸命頑張っけて起こしています。引っ張り起こして、その根元にまた重たいサンゴを運んできて積む。これは今年、非常にまた日本の若者たちが頑張っけて手伝ってきましたけれども、そういった活動をしながら地元の人と一緒に、外にも応援団がいるよ、あなたたちは一人ではないよと。

海面上昇も起きています。今まで住んでいた場所、人々がいた海岸べりの場所が足元にひたひたと満潮の大潮の時に潮が当たるようになりました。台風の時には建物の1階に胸までつかれるほどの波が入ってくるようになりました。人々はいま住居を山の上に上げています。彼らが非常に不安に思っている中で、外から僕たちは見ているよ、応援しているよという存在があることを彼らは大変喜んでくれていると思います。

こういう資源を守る、暮らしを守るというお手伝いをしています。台風による標識が倒れるということも課題ですし、多々他の課題もありますけれども、できれば小さなスモールビジネスをつくって経済的な自立に持っていきたいなと村の人たちと話しています。

現場の環境は非常に小さな規模です。小豆島ぐらいの大きさの島なので、自分が食べたもの、自分が排出したもの、ゴミであれ体から出たフン尿であれ、それがどのように自然の中でリサイクルするのか。海に突き出たような岸壁みたいな所があって、そこから突き出した格好でトイレを作ってもらいます。そこでトイレをすると魚がバシッと来て、その魚をまた後で釣って食べている。そういう循環を本当に生で感じられる場所なので、そういう学びの場としてこの場所をきつと活用できるのではないのかなと思っています。

先ほど言っていました、もう1回戻ります。これはコインランドリーです。コインランドリーの後ろにパイプがあって、ただそこから泡が出て、ここはもう、すごく真っ黒になっています。こういう後処理、あるいは下流行程を考えない開発支援、これはなかなか

よつとつらいものがあるなと思います。

下流を無視した開発援助、あるいは経済活動はたくさんあります。この島では日本のあるブランドのインスタントラーメンが大変よく売られています。島中にそのインスタントラーメンの空き袋が落ちています。

これはこの島の人たちにとっては今まで有機物しかなかったのです。ごみと言っても犬が食べてしまう魚の骨か、お皿に使ったバナナの葉っぱか、そんなものしかごみはなかったのです。それはすべて自然に分解されます。

しかし、プラスチックの袋を放ったらかしにすると、分解されずにそこら中プラスチックだらけになります。アメリカのブランドのビール、炭酸飲料の缶、そして、日本のブランドのインスタントラーメンの袋、そして、日本から持ち込まれた車、それがみんないま朽ちています。これは下流ということはどう考えるかという、今の僕たちの現代社会は下流、「後のこと知らないぜ」「新品はきれいだぞ」「売っちゃえ」みたいなメカニズムが、どうも結果的にいろいろなことを起こしているのではないかということが感じられます。

そして、その流れはどんどんと進んでいるのです。

この島は日本がアメリカとの戦争で負けました。その後、アメリカの国連信託統治領になりました。1980年代になってミクロネシア連邦として独立しましたが、お金がないので、アメリカ政府からの事実上の助成金で生きています。そのアメリカ政府からの助成金は2023年にはなくなります。

ということで、この人たちに代わって登場してきたのが中国資本です。8000人しかいない島に4000室のホテルを作る巨大大業が計画されています。1室に2人で泊まると、それで8000人です。その8000人の面倒を見る従業員は恐らく3000人ぐらい必要です。その飲み水はどうするのか、ごみはどうするのか、それなしにいきなり中国が出てきました。

中国がいま描いている絵です。島のかなりの部分にお金がばらまかれています。恐らくグアム島みたいなかたちになるかもしれません。これは国際政治の中でもあるのです。グアム島が隣ですから、この島を取ってしまえば、いま中国の第二列島線から外へ出て資源が確保できるのです。これはいま民間開発の形ですけれども、実態は島を買収にかかっているのだと僕たちは思います。

そういう現代ポリティクスとエコノミーとの渦の中にいる人たちと一緒に、どういう未来を考えようか。現実はなかなか厳しいです。就職先がありません。キャッシュを生む産

業がないからです。ですから、島の高校生の優等生の3分の1、あるいは半分の就職先はアメリカ軍です。アメリカ軍に行って、すでに僕たちの友達もアフガン、イラクに行っています。何人か死んでいます。

そういう非常に気の毒なことが起きているこの島のエコノミー、これはヤップ島という田舎の話ではなくて、日本の田舎も同じだと思うのです。日本の小さな集落、いま6万あると言われている過疎の集落はほとんど同じ状況で、仕事がないからみんな若者が出ていく。そこに仕事がないから、産業がないからということで大きな何かを誘致する。そういうメカニズムに今なっています。

この島は、何の価値を世の中に提供したいのか。出来るのか。小さな島ですが、島を取り巻くサンゴ礁はCO₂をどれだけ吸収しているのか。その価値をマネタイズするというか、マネー化する、可視化するというのは非常にまた、経済の中でぜひ先生たちにもお願いしたい部分なのですけれども、それは日本と同じことだと僕は感じています。

いま希望を持っているのはこういう若い人たちです。30年お付き合いしていると次の世代たちが生まれてきます。この左にいるティナ・フィルメドさんという34歳の女性です。1997年に現地の子供たちを日本に呼ぶプロジェクトをやったことがあります。その時に高校生でした。東京の夢の島のごみ処分場、当時はものすごく臭かったです。カモメが舞っているようなごみ処分場に行って、あるいは、日本の水のことも彼女に学んでもらいました。

彼女はその後、環境に興味を持って、アメリカ本土の大学に行って法律を学び、いま島に戻って州政府の環境庁の長官、エグゼクティブ・ディレクターになっています。島で一番若い、唯一の女性の局長です。そういう人たちが新しい活動を始めてくれている。今日、この会場にも1人いるのです。板垣さん。一番後ろにいます。今いくつですか。32歳？

板垣 32歳です。

大前 32歳ですか。彼も中学生の時にヤップ島プログラムに参加しました。神戸出身です。高校生になって以降、自分でヤップ島に何度も行き、そして、いま彼は文化人類学者になり、このヤップ島プログラムを支えてくれています。そういう若い人たちが今からこの島のサステナビリティを一生懸命考えています。

単にこれは一つの島の話ではなくて、これは太平洋の島々、日本の農山村にすべて共通する、小さな地域が大きなグローバルエコノミーとどう対峙（たいじ）して、あるいは、

どう折り合いをつけて、そのサステナビリティ、持続可能性をつくっていくかという課題なのではないかと思っています。

今回きっかけをいただきました、りそなアジア・オセアニア財団のご支援に大変深く感謝しています。以上です。どうもありがとうございました。(拍手)